

あの日、君に会ってから

あの日、
君に会って
から

敦賀市立中央小学校

六年

川口菜々子
かわぐち
ななこ



各務原市立那加第二小学校

六年

長谷川侑由
はせがわ
ゆうゆ

岩出明日香
いわいで
あすか

関谷穂月
せきや
ほづき

五年

加藤未帆
かとう
みほ

横山純里
よこやま
じゆり

私は、山坂愛子。小学六年生。これでも日本で結構有名な子役。テレビにだ
って出ているんです。でも、二年前までは、自分の思っていることを素直に表
現できず悩んだり、せっかくできた友達ともきんちようしてほとんど話せず、
友達は私からどんどん離れてしまったり……。特別、人に好かれているわけ
もない内気だった私。そんな私が変わることができたのは、はじめてできた親
友の瑠里のおかげ。私が変わるまでの話を、みなさんに教えましょう。

小学四年のころ。登校して静かに本を読んでいると、担任の浜井先生が見知
らぬ女の子を連れて教室に入ってきた。

「おはよう。転校生の嵐野瑠里さんです。みなさん、仲良くしてください」

「はじめましてえ。海原から引越してきた嵐野瑠里でえす。よろしくう！」
生意気なあいさつをした瑠里。みんなは冷たい視線を向け、周りの人とヒソ

ヒソ話を始めた。瑠里は全く気にしていない様子だった。私はみんなの目を気にしない瑠里にアコガレ、仲良くなっているいろいろな話をしたいと思った。瑠里のようになりたいたいと思った。

その瑠里が、偶然となりの席になった。瑠里が今、となりにいるんだと思うと、きんちようで心臓がバクバクして、今にも口から飛び出してきそうだ。そんな私の気持ちも知らず、瑠里は軽く話しかけてきた。

「名前、何て言うのお」

「や、山坂愛子です……。よ、よ、よろしくお願い……。します……。」

「愛子かあ、よろしくねえ」

「はい……」

瑠里がこんな私に話しかけてくれた。そう思うと、うれしくってうれしくってたまらなかった。最初はきんちようして、返事もままならなかった。でも、仲良くしたいという気持ちもあって、瑠里との距離は少しずつ縮まっていった。

気付けば、クラスで一番の仲良しといわれるような親しい仲間になった。私も親友だと胸をはって言えるようになった。内気な私にこんなに親しい友達ができたのは初めてで、瑠里と過ごす毎日が楽しくって楽しくってたまらなかった。

半年もたったある日の帰り道、瑠里が言った。

「ねえ、愛子」

「何？ 瑠里」

「いっしょに英田劇団に入らない？」

「えっ？」

「英田劇団ってさ、日本でも有名な劇団でさ、卒団生には結構、有名人がいるんだよ。入団者が多いから、友達もたくさんできるかもしれないよ。それに、ちよつとしたCMとかドラマとかにも出られるんだって。すごくない？ 一回行ってみようよ」

私は瑠里といっしょにいて、少しは変わったつもりでいた。でも、私は何も

変わっていなかった。思ったことも素直に口に出せない、内気な私のままだった。

「そんなの無理だよ。はずかしいし」

「いいでしょ。私も行くから。次の日曜日に、体験教室やってるんだって。とりあえず、それだけでも行ってみようよ。入団するかどうかは、行ってみても決めようよ。ね」

「うん……。気が向いたらね……」

「絶対だよ。日曜日、私の家に来て。お母さんが車で送ってくれるって」

「分かった。とりあえず、お父さんとお母さんに聞いてみるね……」

家に帰ると、気が向かないままこの話をした。

「せっかく瑠里ちゃんがさそってくれているんだから、行ってみるよ」

「お母さんもいいと思うわよ。愛子も新しいことを始めてみてはどうかしら」

「うん……」

結局、英田劇団の体験教室に行くことになった私。これが私の運命を変える出来事の始まりだった。★

体験教室に着くと、すでにレッスンは始まっていた。しかし私達が入ると、ぱたつとレッスンは止まった。

「やあ。きみ、体験者の山坂愛子だろ？ 知ってるぞ。担当の人から聞いているよ」

と、リーダーらしい男の子が言った。

瑠里が私のことまで話しちゃったんだと思うと、はずかしかった。でも、「はくい。練習に戻りなさい」

という先生の声におされてレッスンに入った。

まず、発声練習。体験者も同じようにあつかわれ、私はダメダメみたい。瑠里は得意げな顔してるし……。

次は、演技。簡単そうな演技。でも、重要なところ失敗。瑠里は、こんな

簡単って顔してるし……。

レッスンが終わると、もうすっかり夜になっていた。急がなきゃと思った時、「ちよつとく、愛子く。私をおいていけないでよねく」と瑠里が追いかけてきた。

「もう。早く、早く！ お母さんたちが心配しちゃうじゃん！」

「え……」

とつぜん瑠里がだまりこんだ。私は気にせず走っていった。

分かれ道で、瑠里に「おやすみ」と言ったが、どうしてか瑠里はだまったまま帰ってしまった。私はとても悲しい気持ちになった。

家に着くと、どうして瑠里がだまりこんだのか考えてみた。四十分いろいろ考えて、ようやく一つの考えがうかんだ。

「そうか！ 瑠里には私が帰りに言った、冗談半分の言葉が怒ったように聞こえてショックを受けちゃったのかも……」

そう思うと、急いで手紙を書いた。

悲しかったのは、瑠里だったのかと思うと、自分まで悲しくなってきた。せつかくできた友達を悲しませるなんて……。

次の日、手紙を瑠里に渡した。

手紙には、

『 瑠里、私の冗談半分の言葉で悲しませてしまって、ごめんね。

これからも、いつものように仲良くしていこうね。

愛子 』

と書いた。

手紙を読んだ瑠里は、しばらくだまりこんでいたが、

「うん、いいよ。私は全然気にしてないし。愛子、気にしすぎだよ」

と言い、笑っていた。

そのあとは、すっかりいつもの二人に戻って、おしゃべりをしながら英田劇

団へと向かった。

しかし、その後、大変なことが待ち受けていた。

「今度の子役を決める。小四、小五、小六は、脚本を配るから、しっかり読んどけ!!」

私と瑠里は、わくわくした気持ちをおさえられずにしゃべっていた。すると、同じ年らしい女の子が、

「うるさいわよ！ 初心者のくせに」

と、どなってきた。瑠里が言い返そうとした時、昨日の男の子の声が高鳴ってきた。

「こら！ そういうこと言うな」

すると、どなった子は、つかつか歩いて行ってしまった。瑠里と私は、顔を見合わせて笑った。

そしていよいよ、オーディションが始まった。

瑠里は、にやにやしながら言った。

「知ってるうー？ 今度のドラマって、風上君も共演するんだってー」

私は、声が出ないほどびっくりした。風上君というのは、私達に最初に声をかけてくれた英田劇団のリーダーで、女子の人気NO.1なのだ。

私の頭の中は、オーバーヒートした。

そして、オーディション。一人ずつ演技を見せた。私と瑠里は、緊張感をほぐそうとした。

瑠里の番が回ってきた。瑠里はピースサインをしたが、なんと最後のセリフを忘れて終わってしまった、不合格が決定してしまった。

「次、山坂愛子、スタンバイして」

私は、どきどきする胸をおさえて立ち上がった。前に出ようとした時、瑠里

が、

「愛子ー、がんばれー」

ときけんだ。

瑠里がいるから、私はがんばれるよ。

内気な私はもういない——。

「カット」

私は我に返った。そう、今は大ヒットしているドラマの撮影中。

「愛子ちゃん。今の良かったよ。次のシーン、どうぞ」

——私はあの日、オーディションに受かった。そして東京に行く時、瑠里と最後の言葉を交わした。

「どんなに遠くにいても、友達だよ」